ひ ろ し ま レ ポ ー ト

第36回広島平和記念式典参加事業



松　　本　　市



広島の平和記念公園内に設置されている「平和の灯（ともしび）」

「平和の灯」は、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という趣旨で１９６４年8月１日に設置され、全国１２宗派から寄せられた「宗教の火」と溶鉱炉などの全国の工場施設から届けられた「産業の火」が、１９４５年8月6日生まれの７人の広島の乙女により点火されました。

目　　次

〇ヒロシマの願い

〇レポート

目を背けてはいけない歴史	清水中学校２年	舩　越　大　夢	…　１
平和をつむぐ誓い	鎌田中学校２年	中　村　歩乃花	…　２
「目をそらさずに伝え続ける大切さ」	丸ノ内中学校２年	小　俣　理　瑚	…　３
世界平和実現のために	旭町中学校２年	渡　邉　ほのか	…　４
広島で学んだこと	松島中学校２年	岡　野　希　衣	…　６
原爆の被害を後に伝えていくために	高綱中学校２年	矢口　紘太郎	…　８
二度と繰り返さない	菅野中学校２年	村田　夏星	…１０
希望	筑摩野中学校２年	田中　こころ	…１２
「当たり前の日常を守るために」	山辺中学校２年	藤澤　亜希	…１３
平和を想い継げていく	開成中学校２年	松下　桃香	…１４
「明日を生きれなかった人たちのために」	女鳥羽中学校２年	桐山　朱愛	…１５
平和と幸せを願って	明善中学校２年	後藤　優希	…１６
「第三の被爆地を作らないために」	信明中学校２年	荻原　愛実	…１７
平和を願って	会田中学校２年	橋詰　立槻	…１８
平和な世界を願って	安曇中学校２年	大城　胡桃	…１９
広島に残る原爆の残酷さ	梓川中学校２年	佐原　直樹	…２０
私たちでつなぐバトン	波田中学校２年	髙木　莉央	…２１
数字だけでは伝わらないもの	鉢盛中学校２年	大野田　愛子	…２２
当たり前をつなぐ	信大附属松本中学校２年	大月　勇人	…２３
平和のバトン	才教学園中学校２年	佐藤　くるみ	…２４
過去を知り、未来につなぐ	松本秀峰中等教育学校２年	春日　香凛	…２５
広島に行って学んだこと	松本国際中学校２年	竹尾　都望	…２６
「はっぴーす！な世界を目指して」	松本ユース平和ネットワーク	村瀬　紗世	…２７

〇写真記録　…２８

〇広島平和記念式典

平和への誓い　…３１

平和宣言　…３２

〇参加者一覧　…３４

〇旅の日程　…３５

※掲載のレポートについては、できるだけ本人の作文を尊重しています。

ヒロシマの願い

The Prayer of Hiroshima

「原爆(げんばく)に会(お)うた」と、被爆(ひばく)した人たちは言います。 一瞬の破壊、あまりに多くの死、大切な家族さえ救えなかった苦しみ＿＿＿言葉では表現しきれない出来事に「出会って」しまったからでしょう。あの８月６日とそれに続く日々は、「思い出すことさえつらい」ことです。 被爆者はその思いを乗りこえて自分の体験を語り伝え、 再び核兵器を使ってはいけないと、広島の地から訴えてきました。
「ヒロシマ」は世界共通の願いと結びあい、 平和を実現したいといつも願っています。

（広島平和記念資料館　収蔵品より）

目を背けてはいけない歴史

清水中学校２年
舩越　大夢

今年の夏、私は市の事業の一環として広島平和記念式典に参列する貴重な機会をいただきました。

私はもともと、痛い話や恐ろしい歴史を見るのが苦手な怖がりな性格です。広島に行くことが決まった時も、戦争の凄惨な現実に向き合えるだろうかと、少し不安な気持ちがありました。しかし、一日目にあった全国平和学習の集いで被爆者の梶本淑子さんの体験談を聞いた時、その不安は「目を背けてはいけない歴史がここにある。」という強い思いに変わりました。梶本さんのお話の中でとくに心に突き刺さったのは、原爆が投下された時のお話です。突然目の前が真っ青な光に包まれ梶本さんは本能的に物の下へと身を隠した直後、すさまじい爆発音が響き渡り、次の瞬間には意識を失い、だれかの悲鳴で、我に返った時には瓦礫の下じきになっていたそうです。足と腕にガラスの破片が刺さる大けがを負いながらも「木造の建物が、燃え上がるから、ここにいたら焼き殺されてしまう。逃げなければいけない。」という一心で必死にその場から這い出た。という話に私は息をのみました。さらに胸を締めつけられたのは、命からがら逃げ延びた先の世界でした。そこに広がっていたのは、まさしく地獄そのものの光景でした。周囲にいた人々が凄惨なけがを負っており衣服は破れ、皮フが焼けただれた人であふれていました。しかし、そのような極限状態であるにもかかわらず、梶本さんは、自らも傷ついている中で自分よりひどいケガを負った人を他の動ける人と共に安全な場所まで運んだそうです。普通は恐怖と痛みに支配されそうな場所で他者を思いやり、行動をした梶本さんの行動に言葉を失うほどの強い衝撃を受けました。私はこの日「怖くても目を背けてはいけない歴史がある。」ということを心の底から学びました。被爆者の方が高齢になり、私たちは直接お話を聞くことができる最後の世代となります。だからこそ梶本さんから受けとった「二度と同じ苦しみを誰にも味わわせてはならない。」という平和への願いを私たちは決して忘れてはならないと思いました。

世界では今もなお、争いによって日常を奪われている人々がいます。遠い国の出来事だと目を背けるのではなく、まずは身近な人と手を取り合い、互いを尊重することから始めようと思います。広島での経験の記憶を胸に刻み、今度は私が平和のバトンを次の世代へと繋げていくことを強く誓います。

平和をつむぐ誓い

鎌田中学校２年
中村　歩乃花

１９４１年８月６日午前８時１５分。原爆が、広島に落とされた。突然、耳が張り裂けるような爆発音と共に辺りが青白く光る。そして、過去一度も見た事の無い鮮やかで強烈な黒みがかった朱色のきのこ雲が空に立ち登った。晴れ晴れとした空は、灰色に覆われ黒色の雨が降り注ぐ。たった一瞬で広島の街は吹き飛び、人々の当たり前の日常は奪われた。

それから、８１年。私は広島を訪れた。そこで、何よりも心に深く刻まれたのは、被爆者である梶本淑子さんのお話である。梶本さんは、爆心地から３．２㎞離れた戦争で使用するプロペラの製造工場で、プロペラを作っている時に被爆した。そのときは、地球が爆発したように地面が浮き上がり、そのまま気絶し、瓦礫の下敷きになってしまったそう。なんとか、友達と瓦礫を押しのけ外に出ることができた。しかし、目の前に広がっていたのは、太陽のない暗い空と原爆投下前の面影のない街だった。辺りでは、肌が真っ赤にただれた人。顔が膨れ上がり、目が埋もれている人。体に服が張り付いたお化けのような姿の人。川の熱により風船のようにツルツルになって亡くなっている人など大勢いた。そんな中、梶本さんは避難のため、死体で埋め尽くされた街を歩き続けた。そのうちに、段々と人の心を忘れ平気で歩けるようになってしまったそうだ。その後も、色も形もない放射線による後遺症や飢餓、差別に苦しんだ。そして、戦争が終わったと知ったときも、喜びではなく何故もっと早く終わらせなかったのかと、怒りを抱いたそうだ。私もこの話を聞き、民間人を巻き込んだ残酷で理不尽な戦争や、戦後被爆者を苦しめた差別などに対して、言葉で表すことのできない怒りを抱いた。また平和記念資料館では、被爆した生徒の赤黒くなった制服や、溶けて歪んだ自転車。赤や青、紫に変色した死体の惨状を表したイラストなどが展示されていた。なかでも亡くなられた方の写真はとても痛々しかった。火傷を負った方や、死の斑点が出た兵士など沢山の方が記録されていた。写真の撮影者は、恐怖のあまり「カメラを構えたがシャッターが切れない。２０分後やっとの思いで１枚目のシャッターが切れる。」と語ったそうだ。私は、その写真を見て、目を離すことができないほどの衝撃を受けた。

他にも、亡くなった方の言葉や日記も残されていた。私は、一つの日記に目が止まった。その日記は、被爆された木村一男さんの物で「復興に従って人々の頭からあの悽愴は薄れていく。」という深く重い言葉が残されていた。その言葉を見て、核兵器との記憶が徐々に薄れ、忘れてしまう恐ろしさが伝わってきた。

私は、現代を生きる者として、戦争の悲惨さを忘れつつある世界中の人々に、語り伝えていくことが責務だと感じた。そして、平和の大切さを心に刻み、決して忘れずに生きていく。そう強く誓う。

「目をそらさずに伝え続ける大切さ」

丸ノ内中学校２年
小俣　理瑚

みなさんは、自分の話を一番聞いてくれる人が誰だか知っていますか？
それは他でもない、自分自身です。それを踏まえて、もし自分自身がもっとも忘れたい辛い過去の話を何度も聞かされ続ける日々があるとしたら、みなさんはそれに耐えられるでしょうか？

広島での原爆被爆者である梶本淑子さんは、そのような日々に耐えながらも、自ら経験した当時の辛い経験を後世に伝え、戦争を二度と起こしてはならないという強い気持ちで、私たち若者に戦争の悲惨さを伝えてくれました。

今から８１年前の１９４５年8月6日、梶本さんは当時１４歳、今の私と同じ中学生でした。その時代の学生は戦争のためにみな働いており、梶本さんも爆心地から２．３キロ離れた動員先の工場で働いていた最中に原爆が落とされました。衝撃で工場のガレキの下敷きとなった梶本さんは、友人となんとか脱出できましたが、その後に地獄となった広島の街を見ることとなります。それは、腕から皮膚が垂れ下がってお化けのようになって歩いている人々、服が焼けて裸となり、自分のもげた腕を抱えながら悔しく悲しそうに死んでいった少年、腕の骨が飛び出て泣いている友人、そして、あちこちに落ちている大量の死体。梶本さんは当時の記憶を８１年経った今でも鮮明に覚えており、そのお話は恐ろしく、想像したくないものでした。しかし、梶本さんが私たちに伝えたいことはそのような悲劇だけではなく、自分が経験した辛い思いをみんなにはしてほしくない、いつまでも今のように戦後であり続けてほしいという切実な願いでした。

平和記念資料館でもまた、被爆され亡くなった方々の遺品とともに彼らの人生を知りました。その中には、私よりもずっと小さな子もいました。「生きたい」と願いながら苦しみ亡くなったと思うと、とても心が締め付けられました。原爆は放射線によって、被爆時には外傷がなかったり、被爆直後に市内に入った人々にも苦しみを与えました。放射線による原爆病です。その症状は、髪の毛が抜けたり、指先から異形な黒い爪が生えたり、白血病やがんを発症させたりなど様々な症状で人々を苦しめ続け、さらに無知や偏見から、結婚や就職などでのひどい差別まで生みました。

私が訪れた２０２６年８月の広島は、たくさんの高いビルが建ち並び、多くの人々でにぎわう、とても栄えた街でした。しかし、広島で学んだことから、今の街を作ったのは、平和の大切さを伝え守ろうと決意して行動してくれた先人の努力があったからだとわかりました。原爆投下から８１年が経ち、被爆者がいなくなってしまう未来もそう遠くありません。私は今回、梶本さんから直接お話を聞ける貴重な機会を得られました。その経験を無駄にしないよう、お聞きした話を心に刻み、これから伝えていきたいと思っています。

世界平和実現のために

旭町中学校２年
渡邉　ほのか

三日間、貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

私は小学生の頃、世界について学ぶことに興味を持ち始め、将来は誰もが暮らしやすい世界を作りたいという夢があります。今回実際に広島を訪れ、原爆の犠牲になった方々の御冥福と世界平和を現地で祈り、平和な世界をつくるためにもっと戦争や原爆について知りたいと強く思ったので参加させていただきました。

この三日間を通して戦争や原爆、平和についての自分の考えが深まり、新たな学びがたくさんありました。この広島レポートでは広島での体験から感じたことや考えたことを伝えさせていただきます。

まず、私たちは広島に到着してから「全国平和学習の集い」に参加し、被爆者の梶本淑子さんからお話を伺いました。八十一年前のあの日、梶本さんは当時十四歳で爆心地から約二キロメートル離れた工場で働いていた際被爆したそうです。一発の原爆が投下されたことで建物は一瞬にして吹き飛び、広島は地獄のように変わり果ててしまったと仰っていました。広島を流れる七本の川や道路は死体で埋め尽くされ、一瞬で多くの命が奪われたという惨状は想像を絶するものでした。今の私は、梶本さんが被爆された当時と同じ年齢です。私には好きなことややりたいこと、夢がたくさんあり、大切な家族、友達、先生がいます。これまで日常にあった自分の大切な人や物が突然一瞬にしてなくなることは、たとえ命があったとしても私なら絶望してしまい生きる力を失ってしまうのではないかと考えます。思い出したくない辛い過去を今もなお、語ってくださる理由をしっかりと理解し、大切な人やものを次々に奪っていく戦争について私たちは、もっと考えていく必要があると感じました。

日本は唯一の被爆国ですが、今も世界のどこかで戦争が続いており、八十一年前の広島のように建物が崩れ、多くの人の命が奪われ続けています。戦争により解決できることはなく、罪もない人々の命が奪われ続けている状況では、世界に平和は訪れません。戦争のない平和な世界を築くために、私たちはどのような行動を取ればよいのか梶本さんが教えてくださいました。それは、「原爆、戦争のない国にして平和を勉強し、平和を訴え、自分の思いを伝える」ということです。私はこの言葉を梶本さんからお聞きした一人として、これからも平和について考え続け、自分の考えや戦争に対する思いを伝えていきたいと思いました。梶本さんは、被爆した時の状況について私たちに力強く語ってくださり、私は原爆の恐怖を身を持って感じることができました。

最終日に訪れた広島平和記念資料館では、梶

本さんがお話してくださった、原爆が落とされたことで変わり果ててしまった広島の街並みや健康被害にあった方々の様子を写真や絵を通して学ぶことができました。梶本さんのお話を伺った後に見た展示物から、多くの人の命を奪った戦争の恐ろしさをより現実的に受け止めることができました。これまでは、教科書の中で学んだ出来事として戦争をしてはいけないという考えを持っていましたが、原爆投下により一瞬で世界がどのように変わってしまうのかを知り、なぜ戦争がいけないのかをより深く理解することができました。自分の大切な人、場所、もの、夢や希望は戦争や原爆により失われます。私たちの日常を奪っていく戦争が二度と起こらず、世界平和が実現するように私は広島平和記念式典で祈ることができました。これからの生活では、世界平和を祈るだけではなく、世界平和実現のために梶本さんが教えてくださった「原爆、戦争のない国にして平和を勉強し、平和を訴え、自分の思いを伝える」ということができるよう、行動していきたいです。

　今回、貴重な経験をさせていただけたことにとても感謝しています。ありがとうございました。

広島で学んだこと

松島中学校２年
岡野　希衣

私が広島に行って学んだことはいくつかあります。

まず一つ目は「原爆の悲惨さ」です。広島の１日目では、被爆者、梶本さんのお話を聞きました。原爆が落ちたときたくさんの人が焼かれていたこと、火の海になった広島を見たこと、赤黒くお化けのような人を見たこと、原爆投下から日にちがたつと、水路につるつるになった人や動物がいたこと、そしてやっとの思いで生き残っても辛いことがあったこと、信じられない、信じたくないと思ってしまう話を聞きました。

「まだ生きている人を運ぼうと焼かれた人を踏むとぬるっとした。」梶本さんが言っていたことです。梶本さんは８月６日午後８時１５分の広島の町を鮮明に覚えていました。そんな広島の町を３日目の平和記念資料館で写真や資料などで私も見ることができました。原爆に飲み込まれた子供の服、お弁当などの持ち物、黒い雨が染み付いた服などの遺品が並べられているほか原爆の被害にあった人々の言葉や写真、原爆の後遺症により家族が壊れていく実話も展示されていました。中でも特に衝撃的だったのは焼かれた死体の写真でした。肌は赤黒く焼けただれていて目は丸出しの状態でした。原爆によって今では信じられないほど恐ろしいことがたくさんあったこと、そして生き残ったとしても後遺症に苦しみ、家族、友人をなくし普通の生活なんてまともに出来なかった、生きていても地獄だったということを知ることができました。

２つ目は「広島が過去に起こった原爆に対しどのようなことをしていたか」です。まずしていたことは２日目に参加させてもらった広島平和記念式典です。広島平和記念式典では、広島の知事や市長、高市首相や国際連合事務総長たちがあいさつをし、子ども代表が平和への誓いを読んだりして犠牲者の方々を慰めていました。この式典を開くことによって被爆者の方々は安心することができるんじゃないかなと思いました。またそのほかにしていたことは、私も１日目に体験させていただいた全国平和学習の集いです。これからを生きる世代に被爆者の方の話を聞かせ、これから私たちに何ができるか考えることをしました。それ以外では平和記念公園とその周辺の碑を見ることです。それらを見ることによってより実際に起きたことだったんだなとより実感することができました。これ以外にももっとたくさんありますが、私が経験した中ではこれらが代表的なものでした。

学んだこと３つ目は、「これから私たちが何をしていくか」です。梶本さんのお話を聞いたり被爆者四世の話を聞いたりこの広島で学ん

だことを通して私がこの幸せな時間を守っていくため、そしてこれからも戦前にならず、ずっと戦後でいるために出来ることはこの広島の経験を少しでも多くの人に伝えていくことだと思いました。だけどただ広島で経験したことをそのまま話していくのではなく、劇や作文、絵などの自分の出来ること、または得意だったり好きな方法で伝えていくことが一番いいと思いました。

　これら以外でも学んだことはたくさんありました。広島に行ってこのような経験をさせていただいて本当によかったです。そしてこの方法で学んだことを伝え、今よりもっと平和な世界を作っていけたらいいなと思います。

原爆の被害を後に伝えていくために

高綱中学校２年
矢口　紘太郎

空も晴れ渡って、原爆投下時の様な快晴に恵まれた今年８月、平和学習で広島へ行き、原爆について感じたことは大きく二つあります。

一つ目は、やはり原爆による猛威はすさまじく、たくさん使うと地球に壊滅的な被害をもたらし、人類だけでなく地球上で暮らすすべての生物を滅ぼしてしまうことです。

平和記念資料館には、原爆が落ち焼け野原になった広島の街や、爆風や熱線で大けがや大やけどをした人たちの写真、破壊された建物の壁や仏像など、原爆のとてつもない威力を物語る展示が多く、見学をしていて気分が悪くなりそうなほどでした。また、投下後に放射線被害によって病気になったり、周りから差別されたりするなど、被害が収まっても被爆された方には一生影響が残っていました。アメリカがマンハッタン計画の中で核爆弾の実験を行った際には、アメリカ西部の荒野での爆発後にまき散らされた放射性物質が風に乗って東部の都市まで運ばれてゆき、明確な数や実態は不確定ながらも白血病などの病によって子供が命を落とすケースが増加したという話もあります。そんなものが兵器としてたくさん使われれば、今の地球はまず間違いなく崩壊してしまうと感じました。

二つ目は、戦争当時の被害の記憶や物証を保存することが年々難しくなっているものの、ここで何か行動しないと人から忘れ去られてしまうということです。

というのも、原爆投下から８０年以上が経った今、被爆者の方たちの高齢化が進み、当時の記憶が伝承されにくくなっています。また、被爆建物などの建築物や被爆樹木も長い月日の経過によって老朽化が進み、倒壊などの危険があったため、解体・撤去されたものが多くあります。当時を物語る貴重な資料であるのですが、危険と判断されて無くなってしまっています。

ただ、人びとからの強い要望により保存が決まった建物もあります。その代表的な例が「旧陸軍被服支廠」です。２０１９年に広島県が出した方針案は、残っている３棟のうち「２棟は解体し、１棟は外観保存」でしたが、広島市民や被爆者団体から強い反対を受け、「全棟保存し耐震化する」方針に変更されました。現在は耐震化工事が着々と進められています。

当時の記憶や物証がなくなり、被害を伝承していくことが難しくなることで、人々の関心も薄れていってしまうのではないかと感じました。しかし、一人一人が声を上げ、「解体」から「保存」に変えたように、自分たちから行動を起こすことで戦争の記憶の保存に貢献できると思いました。

被爆した方々の声を直接聞くことのできる

今のうちに、被爆者の方たちの記憶や被爆した建築物・樹木などをできる限り多く記録していかなければなりません。今のうちに行動しないと人々の記憶から悲惨な記憶がどんどん薄れていってしまい、行く末には地球のすべてを滅ぼしかねないと思いました。もしかしたら人類は核兵器が完成した時から破滅に瀕しているのかもしれません。

今後も広島・長崎の記憶が受け継がれていくことで、核兵器の危険性を世界に知らせ、多くの人が傷つくことを避けられると思います。

自分たちは、被爆者の方々から話を直接聞ける最後の世代かもしれません。だからこそ原爆の悲惨な記録を今後に受け継いでいくために、自分のできることから行動に移して平和に貢献できるようにしていきたいです。

二度と繰り返さない

菅野中学校２年
村田　夏星

１９４５年8月6日8時１５分、相生橋を目標地点として原子爆弾が投下され、一瞬にして罪のない人たちの平和な日常を奪いました。私は、広島に二泊三日で訪れて心に残ったことが三つあります。

一つ目は、被爆体験者梶本淑子さんのお話です。梶本さんは、当時私たちと同じ１４歳で学校に行けず、爆心地から２．３キロ離れた場所で飛行機のプロペラの部品を作らされていました。すごく暑く晴れていたので、まさか原爆が落ちるとは誰も思っていませんでした。梶本さんは、工場の下敷きになってしまいましたがなんとか友達と助け合って外に出ることができました。たくさんの人が肉や皮膚がぶら下(さ)がり、骨が飛び出て火ぶくれしていてまるで鬼のようだったと話していました。道にはたくさんの人が亡くなっていて、最初は踏まないように「ごめんね」と言いながら歩いていましたが、だんだん感情がなくなり平気で死体を踏んで歩くようになったそうです。まさに、地獄と語っていただきました。

梶本さんは他にも、今の若い世代の人に、学校に行ける、帰ったら「おかえり」と言ってくれる家族がいる全て平和だから大切にしてほしい。いつまでも戦後であってほしい。そのためには、一人でも多くの人に伝えてほしいと話してくださいました。梶本さんのお話を聴いて、本や動画よりもひどく、残酷で涙が出ました。私は、毎日平和で楽しい生活を送っていて、普通じゃないんだなと改めて思いました。今の生活を大切に、精一杯生きていこうと思いました。

二つ目は、グループディスカッションです。グループディスカッションでは「私たちが日常でできる平和を築く行動とは」というテーマで話し合いました。私の班は、北海道や、神奈川などから来た６人で話し合いました。地域や年齢が違う人たちと話し合うことで新たに考えが浮かんだり、深めたりすることができました。私は、違った意見にもしっかり耳を傾けたり、自分の意見もしっかり言うことが平和を築くことにつながると思います。

グループディスカッションが始まる前に、地元の戦争被害の紹介をグループでやりました。広島県の人は、戦争についての授業を頻繁に行っているそうです。その時私は、松本では全然戦争について授業をしていないなと思いました。私は、もっと戦争について学ぶべきではないかと思います。

三つめは、広島平和記念資料館です。資料館は空気が違い入ると鳥肌が立ちました。実際に火ぶくれした人、皮膚が焼け落ちた学生さんの写真などがありました。想像の何倍もひどく、私はしっかり見ることができませんでした。ボ

ロボロになった服からは、生きたい、死にたくないという気持ちが伝わってきました。その中でも印象に残ったのは、放射線の影響で亡くなってしまった、佐々木貞子さんが折った鶴です。紙が貴重だったので、薬の包み紙で、鈍くなった指先のかわりに針を使って、一か月で千羽以上の鶴を折ったそうです。指先が鈍かったとは思えないほど、繊細できれいな折り方に涙が出ました。

　今回広島を訪れて、改めて戦争は何も生まない。ただ、みんなの幸せな生活を奪うものだと思います。私はもっと多くの人に戦争の怖さ、悲惨さを知ってほしい。梶本さんは、若い私たちが頼りで、少しでも多くの人に自分の好きなことで、戦争について伝えてほしいと言っていただきました。私は今回広島に行って、思ったこと学んだことをしっかり周りの人に伝えて、一人でも多くの人に知ってほしいです。

希望

筑摩野中学校２年
田中　こころ

「もう殺してください」。

これは平和記念資料館でみた言葉です。

私は原子爆弾被爆地である広島県広島市に三日間平和学習に行きました。心に残ることが多くありました。あまりにも日常とかけ離れた「戦争」に背筋が凍りました。

特に印象深いのが冒頭の言葉です。

「もう殺してください。」文面から分かる絶望と失望に満ちた思い。この言葉の主は、広島市で被爆し重症を負いました。家族が懸命に、懸命に看病しました。治らない。良くならない。死へと真っすぐ向かう自分の身体。苦しい。怖い。もう嫌だ。そんな気持ちから、この言葉を発したのでしょう。その言葉のまま亡くなりました。

私はこれを見たとき、足がピタリと止まりました。なぜか、動けないのです。展示してある彼の写真。元の写真からは想像がつかない程変わり果て、弱っていました。平和記念資料館には、このような展示が多くありました。私の知らない、壮絶な過去のほんの一部が、私の心に突き刺さりました。それを私よりも小さく幼い子が経験し、死んでいったのです。悍ましいことです。

戦争が奪うものは、街や都市だけでなく、そこで生活する人の活力、生きる希望も全部とられていくのだと感じました。

私がお話を聞いた被爆者の方は、学校の先生になりたかったそうです。しかし、戦争が始まり、するべきことは飛行機のプロペラ作り。「戦争に勝つため、勝つため」と必死に働きましたが、日本は戦争に負け、両親は死に、自分がするべきことは幼い弟たちを養うことだと思い立ち、夢を諦め、ずうっと働きました。未来なんて見えない、語れない、不安だらけで働きました。自分の夢を忘れて。

今の私たちは将来の夢について悩めるのは、自分の未来に不安があまりなく、安心できるからです。しかし、それができない子もいたのです。実際今も戦火が燃え盛る場の子どもはそんなことできません。今を「生き抜く」ことが一番大切なことだからです。私たちもいつ巻き込まれるかわかりません。

今もなお怯えている子どもは世界中にいるのです。そんな子たちが生きる希望をもつためには世界平和が必要だと考えます。

広島で平和と戦争は対極にあり、皆の手が創るものだと感じました。平和と戦争は一人ではつくれません。だから私たち一人一人が声をあげれば、周りも賛同し平和へつながります。

戦争を経験しない私たちは、過ちから目を背けず、語り継ぎ、考え続け、小さなことから平和への一歩をふみださなければなりません。

「当たり前の日常を守るために」

山辺中学校２年
藤澤　亜希

私たちは平和学習のために広島に行ってきました。１日目に参加した全国平和学習の集いでは、被爆者の方から原爆が投下されたときの体験をお話ししていただきました。「窓ガラスに青い光が反射して、気づいたときには真っ黒だった」という話や、水が欲しくて川に飛び込んでも、原爆の熱によって水がとても熱くなり、そのまま全身を焼かれて亡くなってしまったという話を聞きました。そのとき、自分が思っていた以上に原爆は悲惨で残酷なものだったと実感し、改めて戦争の恐ろしさを知りました。また、放射線の影響で今も苦しんでいる人がいることを知り、戦争や原爆は昔の出来事ではなく、今も被爆者の方々の心や体に残り続けているものなんだと感じました。平和について考える時間では、日常でできる平和につながる行動についてグループで話し合いました。話し合いを通して、私が思う平和とは、当たり前に「明日が来る」と思いながら毎日を過ごせることなんだと考えました。平和とは戦争が起きていないだけでなく、安心して未来を考えられることなのだと思います。この当たり前の日々を守っていくことが、平和につながるのだと思いました。

２日目は平和記念式典に参加しました。内閣総理大臣や広島市長の話を聞いたり、核兵器がこの世からなくなるまで灯し続ける「平和の灯」を見たりしました。式典に参加する中で様々な人たちの「もう戦争は起こしたくない」、「平和な世界にしたい」という思いが伝わってきました。

最終日には平和記念資料館へ行きました。原爆が投下された当時の出来事を描いた絵や遺書などを見ました。特に心に残ったのは、私よりも年下の人たちの命が奪われたことです。もし戦争が起きず、原爆が投下されていなかったら、その人たちは、もっと長く生きることができたはずです。そう思うととても悲しい気持ちになりました。原爆は、それまで楽しく暮らしていた人たちの時間や未来を一瞬にして奪ったのだと思います。今回、被爆者の方の話を実際に聞いたり、当事の資料を自分の目で見たりしたことで、今まで自分とは無関係だと思っていた戦争や原爆が、一気に身近なものに感じました。そして原爆や戦争について知ることは、過去の出来事について学ぶだけではなく、今の平和な生活がどれだけ大切なものなのかを考えるきっかけにもなりました。その平和な生活を守っていくために、日常生活の中で相手の気持ちを考えて発言することなどを意識し、自分にできる平和につながる行動を始めていきたいです。

平和を想い継げていく

開成中学校２年
松下　桃香

もしも、自分の大切な家族、友人、街、それら全てが一瞬にして消えてしまったら、私たちはどうなるのだろう。その問いが浮かびました。

８１年前の８月６日午前８時１５分、たった一発の原子爆弾によって、広島の全てが破壊されました。街も、希望も、夢も、明日もです。その威力は想像もできないほどです。私は、今回広島を訪れるまで、戦争や「原子爆弾」について全くと言っていいほど詳しいことは知りませんでした。そのため、印象深く心に残っていることが三つあります。

一つ目は、実際に被爆された梶本さんのお話です。梶本さんが被爆されたのは私たちと同じ１４歳だったそうです。原子爆弾が落とされた後の周りの人々は、目がうまってしまっていたり、うでの肉や皮がはがれて垂れ下がっていたり、鬼のようになってしまっていたそうです。原子爆弾は一瞬にして人々の体まで破壊してしまうような恐ろしく、絶対あってはならないものだと改めて強く思いました。そして、最後に梶本さんは、「いつまでもずっと戦後であってほしい」。「今のあたりまえが平和。あたりまえが続いてほしい」。とおっしゃっていました。「平和」と聞くと難しく感じますが、今、私たちが暮らしている環境自体が「平和」だと実感し、心に強く残りました。

二つ目は、原爆ドーム見学です。原爆ドームを訪れた瞬間に、どこか遠く感じていた「原子爆弾」が近い存在に感じ始めました。原爆ドームは周りの建物と違い、そこだけが時が止まっているように感じました。

三つ目は、平和記念資料館の見学です。展示品には、丸こげになり食べることができなかったお弁当や小さな子どもの三輪車、被爆後の広島の写真や絵などがあり、特に心に残ったのは、遺品です。被爆し、亡くなる直前まで身に着けていた衣服やくつ、時計などで、いろいろな人のいろいろな遺品が展示されており、中には血痕が残ったものも数多くありました。亡くなった人の魂が入っているように感じ、「もっと生きたい」、「夢を叶えたかった」と声が聞こえてくるように感じました。

私はこの三日間、広島でたくさんの事実と向き合い、知りました。私たちにできることはごくわずかかもしれません。しかし、資料を読む、話を聞く、実際にその場を訪れ、肌で感じとり、「戦争」、「平和」について考え、それを周りに伝えることで、「平和」の実現に関われるのではないでしょうか。

「明日を生きれなかった人たちのために」

女鳥羽中学校２年
桐山　朱愛

私は、八月五日、六日、七日と三日間の平和学習で、広島に行きました。

一日目は、「全国平和学習の集い」に参加しました。そこでは、被爆者の方の実体験を聞きました。当時の時代は、中学生でも勉強をせず、代わりに飛行機のプロペラを作るなど仕事をしていました。「戦争に勝つために」、「お国のために」と一生懸命働いていたそうです。原爆が落ちた時の話も聞きました。その話を聞いて、私は、「原爆は悪魔のようなものだ」と思いました。町を一瞬にして変えてしまう、本当に恐ろしいものだと感じたからです。

学校、家、家族、友達、食べ物と次から次へとすべて奪い、破壊していきました。「今、私たちがこうして、当たり前に生活ができるのは、平和である証なんだ」とここで改めて思いました。

二日目と三日目は、平和記念式典に参加して、原爆ドーム、平和記念資料館の見学を行いました。原爆ドームは、鉄骨が見え、どこもかしこもボロボロな状態でした。資料館の展示物からは、「助けて」、「水をください」、「死にたくない」という悲しみを感じ、私は胸が苦しくなくなりました。

あの時、あの場所で自分がいたらと思うと耐えられない。家族や友達を失う悲しみ、痛みと共に過ごす日常、あの頃に自分がいなくてよかったと、安心してしまう自分がいる。でも、あの頃があって、今が生かされているんだと感じました。

三日間の平和学習で学んだことを、今日だけでは終わらせてはいけないと思います。平和の大切さを未来へ伝えていく。それが今を生きる私たちにできることだと思いました。

自分が出来る事は、小さな事かもしれない。でも、誰かのために、あの時、明日を生きれなかった人のために、松本がそして世界が過ごしやすくなるように、小さな事でも積み重ねていくことが大切だと思いました。

「ごめんね」、「ありがとう」を言える心、隣にいる誰かに思いやれる心、そんな心があれば、きっと世界は平和になるのかもしれないと思いました。

平和と幸せを願って

明善中学校２年
後藤　優希

僕は八月六日、学校の代表として広島平和式典に参加しました。広島へ行く前は、戦争や原爆について知っているつもりでしたが、実際に現地に訪れることで平和について改めて考えることが出来ました。

今回の研修では、一日目にヒロシマ平和学習受入プログラムに参加。二日目には広島平和記念式典に参加、その後、広島平和記念公園を見学し、その後江田島旧海軍兵学校を見学しました。三日目に広島平和記念資料館を見学しました。今回の広島訪問で、たくさんのことを感じ学びました。その中から特に印象に残ったことを話します。

一つ目は広島平和記念公園の見学です。原爆ドームと原爆の子の像を見ました。原爆ドームは一発の原爆の影響とは思えないほど、建物が大きくこわれていました。実際に見たことで、原爆の恐ろしさを感じました。原爆の子の像の周りには、たくさんの千羽鶴がかざられていました。毎日絶えることは無く、多くの人が平和への願いを込めて千羽鶴を持ってきていることを知り、平和を願う人がこんなにもたくさんいるのだと感じました。

二つ目は、被爆者の方のお話を聞いたことです。原爆が落とされた時その方はプロペラを作っていたそうです。原爆によって周りにいた人達はみんな顔が焼かれ、苦しみながらみんな川に飛び込んでいったそうです。そしてみんな水を欲しがっていたそうです。負傷した人達は大芝公園に運ばれました。また、戦争中に一番辛かったことは、食料不足と話してくれました。食べる物が十分に無い生活が続いていたことを知り、今の自分達が当たり前のように食事を出来ることは決して当たり前ではないのだと感じました。

三つ目は広島平和資料館の見学です。館内には原爆が落とされた時の様子を伝える写真や資料、熱によって溶けた鉄骨、そして亡くなった方の遺品などが展示されていました。その中でも特に心に残ったのは、黒い雨という言葉です。原爆が落とされた時、黒い粘り気のある雨が降ったそうです。黒い理由は、雨の中に原爆の放射線が含まれていたということが分かりました。原爆によって、何十年も経った今でさえ多くの人が苦しんでいるということを知りました。改めて戦争の悲惨さを知りました。今でも世界では戦争がおきて、兵士だけではなく、戦争とは関係のない市民の命までが奪われています。僕は過去に長崎を訪れたことがあるのですが、その経緯に加え、今回広島を訪れたことで、二つの被爆地について学ぶことが出来ました。原爆の第一目標が小倉だったことや、新潟、仙台、神戸、名古屋なども候補地にはいっていた事を知り、戦争や、原爆は自分達にとって決して遠い過去の出来事ではないと感じました。

今日の広島訪問を通して、戦争や幸せの大切さについて深く考えることが出来ました。今の平和な生活を当たり前だと思わずに周りの人達にも伝えていきたいです。そして、平和とは誰かから与えられるものではなく、世界中の人々で創りあげていくものという言葉を胸に、世界中の人々が安心して暮らせる平和な未来をみんなで創っていきたいです。

「第三の被爆地を作らないために」

信明中学校２年
荻原　愛実

私は広島平和記念式典参加事業に参加して、色々なことを学び感じました。その中でも、特に考えさせられた体験が三つあります。

一つ目は、被爆者の方のお話です。お話してくれた梶本淑子さんは、投下される前から戦後までの悲惨な体験を教えてくれました。淑子さんは当時十四歳で飛行機のプロペラを作る作業中に被爆しました。原爆が投下された瞬間、地球が爆発したような感じで自分の体ごと浮き上がり意識を失ったそうです。意識をとりもどした後、まのあたりにしたのは想像を絶する光景だったそうです。肉がぶら下がって骨がとびだしている人がたくさんいて、まさに地獄のようだったとおっしゃっていました。このような体験を聞き私は、もうこんな地獄をつくりだしてはいけないと思いました。淑子さんは、若い世代に伝えたいことは「まもなく被爆者がゼロになるので私たちの考えを伝えてほしい。いつまでも戦前ではなく戦後であってほしい。」と言っていました。私は、自分が得意なやり方で伝えていきたいです。

二つ目は、平和記念式典で色々な方々の思いを聞いたことです。高市内閣総理大臣や広島市長、子ども代表らがどうしたら平和への第一歩をふみ出せるかを語っていました。平和とは、あたえられるものではなく、創り上げてくものだと言う言葉が印象に強く残りました。

三つ目は、広島平和記念資料館の見学です。入った瞬間、壁一面に原爆が投下された後の空っぽの都市の写真が広がっていました。奥に入っていくと、投下直後の絵や被爆された方の遺品、写真がたくさんありました。言葉だけでなく目で見ることで、悲惨さがよりいっそう強く感じられました。そんな中でも、今だに核兵器を持つ国が増えていることに恐ろしく感じました。

私は、広島を訪れて被爆者の口から体験したことを直接聞ける世代として、当時の記憶をしっかりと受け止め、目をそらさずに向き合い、第三のヒロシマ・ナガサキを作らないためにも平和につながる行動を考え、実行していくことが大事だと考えました。

平和を願って

会田中学校２年
橋詰　立槻

昭和二十年、八月六日、午前八時十五分広島に一発の原爆が落とされ街は一瞬で焼け野原になった。落とされた後の街ではそこら中に人の死体があり、たくさんの人が水を求めて歩いていた。「恐怖しかなかった、感情がなくなった」と被爆者の方々は言っていました。

僕は今年、戦後８１年の広島平和記念式典に参列しました。実際に広島へ行ってみて特に印象に残っていることが３つあります。一つ目は１日目の全国平和学習の集いでお話をしてくれた梶本淑子さんのお話です。梶本さんは、当時十四才で爆心地からは２．３キロ離れていたところで飛行機のプロペラを作る作業中に被爆しました。その時の様子は、目の前が突然真っ青になりその後にものすごい爆風が押し寄せたそうです。梶本さんからは、痛いという言葉が何度も出てきていて、そのたびに僕の胸が締め付けられました。戦争が終わったと梶本さんが聞いたときの心情は「もっと戦争が早く終われば、犠牲にならなかった生命があったのに」と言っていました。想像だけではわからない、原爆を体験した人だけが言える言葉ばかりでした。

次に僕は、原爆ドームに行きました。原爆ドームは、戦争の悲惨さを物語っているような雰囲気がありました。原爆ドームは、すぐ近くの空中で原爆が炸裂したためひどく倒壊したが奇跡的に残ったらしいです。僕たちは次に平和の鐘を見に行きました。平和の鐘はすごく難しい構造をしているのですが、その構造にも色々意味があるらしいです。僕は、平和の鐘を鳴らすというすごく貴重な体験をしました。この貴重な体験を忘れずに戦争の悲惨さといっしょに伝えていきたいです。僕は、原爆ドームや平和の鐘を見て、戦争は二度と世界では起きてはいけないことだということがわかりました。

３つ目が、広島平和記念資料館です。ここは、薄暗い部屋に被爆者の写真や遺品などがたくさん展示されていました。３日目にあった梶本淑子さんが言っていた「感情がなくなった」と言っていたことを彷彿とさせる悲惨さがありました。展示物には、子どもたちが当時使っていた三輪車や、お弁当箱、水筒など、さっきまでなんの変哲もない日常を送っていた人たちの生々しい物があり、より一層心がしめつけられた感じがしました。

最後に、僕たちは当たり前のように過ごしている日常が決して当たり前ではなく、過去の歴史を正しく学び、次の世代へ伝えていくことが今の僕たちにできることなのではないかと思います。それを伝えれば、世界が平和になる第一歩だと僕は考えます。広島から発せられているこの被爆者の方や原爆でなくなった方の声を胸に、これからを生きていくことが平和につながるのではないかと思います。

平和な世界を願って

安曇中学校２年
大城　胡桃

８月５日から７日までの３日間、私たちは広島を訪れました。その３日間で、私たちが今生きていることはどれほど幸せで、かけがえのないことなのかを痛いほど感じました。

松本を出発し約５時間、ようやく広島へ到着しました。広島へ向かう途中、平和学習事業の他の地域の方々と思われる団体を見かけました。さらに、１日目に「全国平和学習の集い」に参加したとき、大きな会場にとても多くの人々が集まっていました。この事業が貴重な体験であり、大切であることは分かっているつもりでしたが、これほど多くの人々が集まるとは想像していませんでした。その光景を見たとき、この３日間で広島についてさまざまなことを知り、伝えていく責任があるのだと感じました。

「全国平和学習の集い」では、被爆体験講話を聞いたり、グループ・ディスカッションをしたりしました。被爆体験講話では、被爆当時１４歳だった梶本淑子さんのお話を聞きました。１４歳というのは私とあまり変わらない年齢で驚きました。梶本さんが伝えてくださった被爆当時のお話は、想像してもしきれないほど残酷なものでした。梶本さんがアメリカから来た留学生に被爆体験講話をしていたとき、「アメリカを恨んでいる」と伝えると、留学生の方が何度も頭を下げて謝ったそうです。その姿を見て、この人たちに謝らせてはいけない、前を向いてこの体験を伝えていかなければならないと思ったとおっしゃっていました。その記憶が辛いものであったとしても、たくさんの人々に伝え、知ってもらうことは本当に大切なことだと学びました。

グループ・ディスカッションでは、「私たちが日常にできる『平和を築く行動』はどんなものだろう」というテーマで話し合いました。世界の大きな仕組みから、国家の仕組み、自分の身の回りのことへと考えていきました。これまでも平和のために何ができるかを考えたことはありましたが、実際にどんなことをすればよいのか分かっていませんでした。しかし、世界の大きな仕組みから考えたことで、自分たちの行動も世界を平和にすることにつながっているのだと分かり、具体的に何をすればよいのかを知ることができました。

私たちには、この３日間で見たり、聞いたりしたことを伝えていく責任があると強く思いました。梶本さんは、「たくさん学び、自分の得意なことでたくさんの人に伝えてほしい」とおっしゃっていました。

ご飯を食べられる、学校へ行って勉強ができる、家族や友達と話せる、笑い合える。この当たり前の毎日こそが「平和」であり、何にも変えられないかけがえのないものです。このことを忘れず、この毎日が奪われることのない世界を願いながら、今の自分にできる平和をつくるための行動をしていきたいです。

広島に残る原爆の残酷さ

梓川中学校２年
佐原　直樹

ぼくは三日間にわたる広島の平和学習に参加しました。

まず、一日目の最初に参加したのが「平和学習の集い」です。全国各地から中学生だけでなく、小学生や高校生など、たくさんの人が参加しており、会場はいっぱいでした。その集いでは、主に二つのことをしました。一つ目は、被爆者の梶本淑子さんによる被爆体験講話です。淑子さんは当時十四歳で、仕事をしている時に被爆したとおっしゃっていました。当時の学生は勉強ではなく、家を壊して逃げ道を作る作業をしていたそうです。この日の空はとても明るく、暑かったと話していました。原爆が落ちたとき、窓に真っ青な光が流れ、爆発音が響き、地面が盛り上がって体が宙に浮いたそうです。原爆の前触れのような現象だけでも、見たり聞いたりするだけで、「怖い」という言葉では言い表せないほどの恐ろしさだったのだろうとぼくは思いました。そして、淑子さんが被爆した人たちの様子を話し始めたとき、一枚の写真が映し出されました。ぼくはその写真を見て、とても驚きました。全身を赤くやけどした生徒や、同じく大火傷を負った大人が子どもを抱えて泣いている、あまりにも残酷な写真でした。ほかにも、皮ふが垂れ下がった人がたくさんいたり、骨が折れたり、目が飛び出ていたという話を聞いたときは、想像もできませんでした。

二日目は、平和記念式典に参加しました。式典には、世界中の国からたくさんの人が参加していました。広島市長や広島の小学生代表、内閣総理大臣のスピーチがありました。ぼくがその中で一番印象に残ったのは、小学生代表による「平和への誓い」でした。語られている内容は深く、原爆の恐ろしさが伝わってきました。式典が終わった後は、ガイドさんに付いて平和記念公園の中を回りました。手のひらに火が灯してある像、千羽鶴を折った女の子の像など、平和を願うたくさんのモニュメントを見ました。そして、原爆の悲惨さを今に伝える原爆ドームを間近で見ることができました。ほとんどの外壁が崩れ落ち、建物の中がほぼ丸見えでした。また、原爆ドームを残すことで、「戦争を二度と繰り返してはいけない」と伝えようとする人々の強い思いも、すごいと感じました。

三日目は、平和記念資料館に行きました。館内の資料や絵は悲惨なものばかりでした。資料館には今まで見たことがない展示もあり、デジタル技術を使って当時の様子をリアルに伝えていました。原爆が落ちた瞬間、あたりの建物がすべて崩れ、その後には何も残らなかったことが分かります。資料館に入る前にも、その様子を表した写真がありました。原爆が落ちる前は、たくさんの人がいて、とてもにぎやかな街でしたが、原爆が落ちた後は、きれいな街並みがすべて跡形もなく消え、人もいなくなって殺風景な景色が広がっていました。あの広島の様子を表した壁を見るだけでも、原爆による悲惨さがとてもよく理解できました。

ぼくがこの三日間で特に強く感じたことは、原爆が落とされた広島の姿は、何もかもが残酷だということです。この歴史を忘れてはならないと思いました。

私たちでつなぐバトン

波田中学校２年
髙木　莉央

戦争は昔あった事だから今の私たちには関係ない。この考えは違うということを改めて実感した３日間でした。

私は８月５日、初めて広島を訪れました。高いビルが並び、人が行きかうこの町が８１年前、一つの核兵器「原子爆弾」によって焼け野原となってしまった事が本当なのか信じられないほど美しい町でした。

しかし、被爆者・梶本淑子さんの被爆体験講話を聞き、本当に原爆はこの広島に落とされたのだという現実を深く知りました。梶本さんは被爆当時、私と同じ１４歳だったそうです。８月６日午前８時１５分、突然窓ガラスから真っ青な光が差した次の瞬間、体が宙に浮き、気づいたときには、がれきの下にいたそうです。がれきの下から出て見た光景は、もう梶本さんの知っている広島ではなく、「七十五年は草木も生えぬ」と言われるほど、なにもない広島が広がっていたそうです。言葉では言い表せないような死のにおい、人でいっぱいの川や道、もう感情はなくなっていたそうです。もし自分が今こんな経験をしたら、思いだすだけでもつらいのに、梶本さんはその経験を語り継いでいく道を選びました。それは本当にすごい事だと思います。その思いをしっかりと受け取り、私も身近な人に伝え、語り継いでいこうと強く思いました。

２日目に訪れた江田島旧海軍兵学校では、大きな３枚の紙にびっしりと、お国のために飛び立っていった特攻隊の方々の名前が書いてありました。この中には、大切な人と生涯を共にしたかった人、生きたかった人、やりたいことや夢があった人がたくさんいたはずです。そう思うと胸が苦しくなりました。今の平和があるのは、これまで多くの人たちが命をはって戦い、平和を願い、諦めずに行動してくれた過去があるからです。このことは絶対に忘れてはいけません。しかし今、その平和を当たり前だと思っている人が多く、日常の中で人を傷つける言葉を耳にすることが多くあります。そのような人を減らすには、相手のことを考え、思いやることの大切さを知ることが必要です。そのために毎日一回でも相手のことを考えて行動してみましょう。例えば、すれ違う人に笑顔であいさつをする、プリントを渡すとき相手が受け取りやすいように渡す。このようなささいな行動でも、一人一人が意識することで、平和を守る大きな力になると思います。

「私がつなぐバトン」は、自分が得意な演劇で、戦争のことや命の尊さを伝えていくことです。悲惨さや悲しみだけを伝えるのではなく、見ている人に感動を与え、「生きる楽しさやすばらしさ」を感じてほしいです。それが私の考えるバトンの渡し方です。最初から大きな一歩を踏み出さなくてもいい。自分の出来ることを考え行動していけば、「平和」のバトンはどんどん次世代の人につないでいけるはずです。
こうして自分も相手も大切にし、世界中が「平和」で満ちあふれるようにしたいです。

数字だけでは伝わらないもの

鉢盛中学校２年
大野田 愛子

原爆によって多くの人が亡くなったことを、私は以前から知っていました。しかし、数字として知っているだけで、その一人ひとりにどのような日常があり、どのような思いでその日を生きていたのかまでは考えたことがありませんでした。

八月五日から七日までの三日間、私は広島平和記念式典参加事業に参加しました。戦争や原爆について、実際に見たり、聞いたりしながら考えることができ、充実した三日間となりました。

一日目は、被爆者である梶本淑子さんのお話を聞きました。お話の中で特に印象に残ったことは、景色と感情の差です。梶本さんが見たのは、赤い空、おばけのような人々の姿。そんな地獄のような景色の中思ったことは、「私、生きているんだ」。私は驚きました。到底喜べるような景色ではなかったはずだからです。それでも純粋に喜びを感じていたことから、当時の人達がどれほど過酷な状況に置かれていたのかを考えさせられました。

二日目は、平和記念式典に参加しました。原爆によって亡くなった方々への祈りや、平和を願う言葉を聞き、何気なく使っていた「平和」には、たくさんの人の願いや、二度と同じことを繰り返してほしくないという思いが込められているのだと感じました。また、式典に参加している人の多さから、平和を願う気持ちは今も多くの人に受け継がれていることが分かり、これがずっと続いてほしいと思いました。

三日目は、平和記念資料館を訪れました。そこには、被爆した方の写真や遺品、当時の様子を伝える資料などが展示されていました。授業などでも原爆について学んできましたが、実際の写真や遺品を見ると、全く違う感覚になりました。特に心に残ったのは、亡くなった方や残された家族の言葉でした。そこには、家族への愛や、大切な人の帰りを待つ思いが残されていました。その言葉を読んでいると、原爆が一気に身近に感じられ、何気ない日常や大切な人と過ごせていたはずの未来が一瞬で奪われた事実に涙が溢れそうになりました。そして、数字だけでは、伝わらないものがあると強く感じました。亡くなった人の数は数字で表すことができても、一人ひとりの人生や悲しみまで数字で表すことはできないということを資料館で見たものは強く感じさせました。

この三日間を通して、私は「平和」という言葉について以前より深く考えるようになりました。家族と一緒に過ごせること、友達と笑えること、自分の好きなことを自由にできること。当たり前が続けられているのは平和の証なのだと気づきました。今回、広島で見たり、聞いたり、感じたりしたことを、三日間だけの思い出にしてはいけないと思います。被爆者の方の高齢化が進み、直接お話を聞ける機会が少なくなっている今、私達が平和について学び、次世代へ伝えていくことが必要です。三日間の学びを終えた今、私は「知っている」だけではなく「考え、伝え、行動する」ことを大切にしたいです。数字だけでは伝わらない一人ひとりの思いを忘れず、これからも平和について考え続けていきたいです。

当たり前をつなぐ

信大附属松本中学校２年
大月 勇人

１９４５年8月6日午前8時１５分。広島の上空に原子爆弾「リトルボーイ」が投下されました。そして、上空約６００mでさく裂し、人々の夢も、希望も、当たり前の日常も、全て吹き飛ばしました。

実際に被爆した梶本淑子さんの話を聞ける貴重な機会がありました。梶本さんは原爆がさく裂した後の光景を「この世のものとは思えない地獄の光景」とおっしゃいました。当時１４歳だった梶本さんは飛行機のプロペラを作る作業中に原爆がさく裂しました。原爆がさく裂した後、梶本さんはたおれてきた柱やがれきに体をおさえつけられ、身動きがとれずにいました。そのあと自分の下じきとなっていた友人と助けあって、なんとか抜け出せました。ですが、右腕にはガラス片がささっていたそうです。その後避難する途中に地獄の光景を見ました。髪は逆立ち、両手の皮ふは垂れ下がり、両手をおばけのようにつきだした人々、そんな光景を見た梶本さんはきっと恐ろしかったと思います。更に数カ月後、死体の火葬をしているときに腐った魚のような臭いが衣服にしみついて取れなくなるという強烈な体験をしました。そのせいか、一時期水を飲みこめなかったとおっしゃっていました。話が終わった後、梶本さんは「みんなの行動で日本を変えられる。だから戦争や原爆をなくして平和な国にしてほしい」とおっしゃり、次に「戦争や原爆のことを聞いて、どう感じたかを好きなことや得意なことで伝えてほしい」とおっしゃいました。最後に「『当たり前』を大事にするように」とおっしゃいました。自分はこの話を通じて、自分の想像していた以上に戦争や原爆の被害が悲惨だと実感しました。

そして、そんな悲惨さを実際に目で見れる、広島平和記念資料館を訪れた際にもまた衝撃を受けました。特に原爆で亡くなってしまった子供たちの遺品に衝撃を受けました。中でも自分と同じくらいの中学生３人の遺品が印象に残っています。原爆によって亡くなってしまった当時の服。その服からは家族を失ってしまった悲痛な気持ちが伝わってきました。この遺品を見た自分は「苦しかっただろう」「家族に会いたかっただろう」「もっと生きたかっただろう」と思い、胸がしめつけられました。

こんなことをもう二度と起こさせないようにするにはどうすればいいのだろう。そんなことを考えていた時に、梶本さんのお話が頭に浮かびました。「戦争や原爆のことを好きなことや得意なことで広めてほしい」。梶本さんは自分の方法で広めることが大事だとおっしゃった。さらに、「『当たり前』を大事にするように」とおっしゃいました。また地獄の光景を作らないためにも『当たり前』の大切さを広めていくべきではないかと思いました。

平和のバトン

才教学園中学校２年
佐藤　くるみ

木がつき刺さった自分の足。血だらけになった友達。あちこちから聞こえる、助けを求める声。そして、何もなくなり、更地になってしまった自分の故郷。あなたは、この状況を想像することができますか？

私たちはこの夏、ヒロシマを訪れました。そして自分の目で、当時起きた悲劇、今もなお残るその影響などを学んできました。その中で、私が特にショックを受けた体験は二つありました。

一つ目は、被爆者の梶本淑子さんのお話です。梶本さんは、私たちと同じ歳の十四歳で被爆されました。もし私が今、一瞬にして故郷や大切な人、夢や希望を失ってしまったと考えたら、耐えられない思いになります。歩くために死体を踏みつけても平気なほどに、人としての感覚さえも奪ってしまう、そんな原爆は本当に恐ろしいものだと身に沁みて感じました。お国の為にと信じて必死で働いて、でも沢山のものを失って、終戦の時は、本当に怒りや悲しみなど複雑な気持ちだったのだろうと思います。終戦後もすぐに生活は改善されたわけではなく、貧困の他に、被爆者に対する差別もあったそうです。望まれて被爆したわけではないのに、偏見だけで差別されていたという事実にとても怒りを感じました。また、実際に被爆された方々の話を生で聴くことができる私たちは、本当に恵まれているんだと思うと同時に、これからは私たちがそれを繋いでいかなければならないんだと改めて思いました。

二つ目は、広島平和記念資料館です。そこには、当時の写真や家族に向けた手紙、遺品、文章など、本当に色々なものが展示されていました。どんな小さなものでも、当時の悲惨さを物語っているようでした。中でも、小さい子供服や、遺書などは、見ていて本当に心が苦しくなりました。影が焼きついた石段、黒く焦げた弁当箱などは、当時ちゃんと日常がそこにあったことを表していました。

原爆投下の一瞬で命を取り留めたとしても、その後に病気や怪我で苦しんでいたら、生きるのも辛かっただろうなと思いました。

私たちは、喉が渇いたら水を飲み、お腹が空いたらご飯を食べ、疲れたらベッドで安心して眠ることができます。それは今では当たり前のようにあるものですが、それは本当に恵まれたことなんだと実感しました。その日常に感謝して生きていこうと思いました。

被爆体験を語ることは、被爆者の方々にとって、とても辛く、苦しいことのはずです。それでも、同じ悲劇を二度と繰り返さないために、被爆者の皆さんは語り続けてくださっています。戦争を直接体験した方々が少なくなってきている今、私たち若い世代が戦争の悲惨さや残酷さ、そして平和の尊さを受け継ぎ、次の世代へ伝えていくこと。それが、私たちに与えられた使命だと思います。

過去を知り、未来につなぐ

松本秀峰中等教育学校２年
春日 香凛

私は広島を訪れる前は、原爆は昔に起きた出来事だと感じました。学校の授業で戦争について学んだことはありましたが、自分事として捉えられていませんでした。ですが今回、実際に広島を訪れ、原爆や戦争に対する考え方が大きく変わりました。

一日目、私たちは被爆者の梶本さんから当時の事を聞きました。実際に経験した人にしかわからない思いや、戦後食べものがなかったときの苦労を知り、原爆は命を奪うだけでなく、その後の人生にも長く影響を与えてしまうのだと知りました。梶本さんの話を聞いて、私は「伝える」ことの大切さを感じました。つらい経験をした当時のことを思い出して、人に話すのは、きっと簡単なことではないはずです。それでも私たちに話してくださったのは、戦争や原爆の恐ろしさを知ってほしい、同じことを繰り返してほしくないという思いがあるからだと思います。私たちは戦争を経験していないからこそ、梶本さんのお話を忘れず、次は自分たちが伝える番だと思いました。

平和記念資料館では、原爆によって被害を受けた方々の写真や遺品などがありました。特に、手紙や日記などを読むとその人の思いが直接伝わってきました。当時着ていた服、使っていた物など様々なものが残っていました。それを見ると、原爆で亡くなった人たちも私たちと同じように家族と過ごしたり、友人と楽しく話したりしているのがわかりました。もし自分がその時代に生きていたら、家族や友人を失っていたかもしれないと思うと、とても怖いです。私たちが何気なく過ごしている毎日は、決して当たり前なものではないと気がつきました。

朝起きて学校へ行き、友人と話し、家に帰って家族と過ごす。私にとっては普通の毎日ですが、それを普通に過ごせることが平和なのだと思います。今回広島へ行ったことで、普段の当たり前だと思っていた日常をもっと大切にしたいと思いました。広島での経験を通して一番伝えたいことは、原爆や戦争を昔の出来事として終わらせないことです。これから時間が経つにつれて、被爆者の方から直接お話を聞ける機会は少なくなっていくと思います。だからこそ私たちが聞いたことや見たものを忘れずに、次の世代に繋げるのが大切です。

広島を訪れたことは、私にとって平和について真剣に考えるきっかけになりました。そして、広島で学んだことを自分の中でだけで終わらせず、周りの人にも伝えていきたいです。一人一人が平和について考え、行動することが、平和な未来につながっていくのだと思います。

広島に行って学んだこと

松本国際中学校２年
竹尾　都望

私は、８月５日から８月７日まで、２泊３日で広島へ平和学習に行きました。

１日目は「第２回全国平和学習の集い」という活動に参加しました。実際に被爆された被爆体験者の方の話を聞きました。１９４５年８月６日午前８時１５分に、広島に原爆が投下されました。その時、爆心地から２キロほど離れた場所で被爆した方が、当時の様子について話してくださいました。原爆が落ちたときのことや、その後の広島の様子について聞き、戦争の恐ろしさを感じました。また、原爆が落ちた後の広島では、たくさんの人が亡くなり、街も大きな被害を受けたことを知りました。被爆体験者の方が、当時のことを今も伝え続けていることにとても感動して、平和への思いへの気持ちが強く動かされました。

２日目は、広島平和記念式典に参加させてもらいました。会場には全国から多くの人が集まっていて、色々な地域の人が戦争の歴史や平和について考えていることが分かりました。式典では、平和への思いを改めて感じました。

３日目は、広島平和記念資料館を見学しました。そこで私は、８１年前にどんなことが起きたのかを、実際の資料や展示を見ながら知ることができました。そこには、当時の持ち物なども展示されていて、原爆によって多くの人々の生活が一瞬で奪われたことを実感しました。資料館に展示されていたものを見ていると、戦争が実際にここにいた人たちの生活の中で起きたことなのだと感じました。

今回の平和学習を通して、私は戦争や原爆について、これまで以上に深く考えるようになりました。今までニュースや授業などで知っていたことも、実際に広島を訪れて、被爆体験者の方の話を聞いたり、資料館を見学したりすることで、よい身近なこととして感じることができました。また、平和は当たり前にあるものではなく、一人ひとりが平和について考え、行動することによって、作られていくものだと思いました。今回学んだことを自分だけで終わらせず、周りの人にも伝えていきたいです。そして、戦争がなくなり、誰もが安心して生活できる平和な毎日を実現させたいです。

「はっぴーす！な世界を目指して」

松本ユース平和ネットワーク　松本美須々ヶ丘高等学校
村瀬　紗世

私は今、平和な毎日を過ごしている。友達と笑い合ったり、おいしいご飯を食べられたり、好きなことを思う存分できたりする生活。私はそんな毎日を本当に幸せだと思う。けれど、時々、「こんな平和な毎日を自分が受け取っていいのだろうか」と考えることがある。なぜ私は、今を幸せに生きられるのだろう。私にとって「平和」ってどんなことだろう。

自分の答えを見つけたくて、私は松本平和ユースネットワークに参加し、広島で平和学習を行う機会を得た。広島では原子爆弾について学んだ。特に心が動かされたのは、梶本淑子さんの被爆体験談だった。本や映像で学ぶこととは全く違い、体験者の生の声を聞くことで、戦争というものが自分の身近なこととして感じることができた。

お話を聞いて、戦争が奪っていくのは命だけではないのだと知った。戦争で命を落とした人にも、一緒に居たい人や、叶えたかった夢、これから続いていくはずだった未来がある。私が当たり前に生きてきたような日常を突然に奪われてしまった人が多くいる。そのことを考えると、私は何気なく過ごしている一日もあたり前ではないのだと改めて認識させられた。

そして私は、梶本さんのお話を聞くだけで終わりにしたくないと思った。戦後八十一年、戦争を実際に体験した人が減っている中で、自分が聞いたことや感じたことを誰かに伝える活動をする。それが「私が平和に生きる意味」なのではないかと考えた。

広島へ行く前の私は、平和について「戦争がないことだ」と、どこか単純に考えてしまっていた。しかし、広島で感じたこと、見て聞いたことを通して、平和とは身近にあるものなんだということを感じた。だから私は、今ある日常を「当たり前」としてとらえるのではなく、一日一日を大切にしていこうと思う。

そして、広島で学んだことを自分の中にとどめておくのではなく、自分なりの方法で、誰かに伝えたい。

私にとって平和とは、特別なものではない。とても身近なもので、何気ない一日一日を大切に生きることだ。そして、未来へつなぐことが「はっぴーす！」な世界を作っていく第一歩なのかもしれない。

写真記録

８月５日（水）

全国平和学習の集い









８月６日（木）

広島平和記念式典





平和記念公園見学（原爆ドーム・折鶴献呈）





江田島旧海軍兵学校









8月7日（金）

平和記念資料館見学













平和への誓い

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。
私たちが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。
今もどこかで、当たり前の日常がうばわれています。
ぼろぼろになった制服。
黒く焦げたお弁当箱。
それは、当たり前の毎日を生きていた証です。
昭和２０年（１９４５年）８月６日、午前８時１５分。
たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。
髪は焼けちぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷した皮膚が垂れ下がった人々。
「痛いよ。苦しいよ。」
「助けて、お母さん。」
「死にたくない。」
「助けてあげられなくてごめん。」
死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。
私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、
当時の記憶を事実として受け止める使命があります。
目をそらさず、知ろうとすること。
悲しい現実でも向き合うこと。
そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。
私たちには、広島のこどもとして、行動する責任があります。
相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。
平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。
一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。
平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。
こどもである私たちも、その一員として平和への一歩を踏み出します。
かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。

令和８年（２０２６年）８月６日
こども代表　　広島市立高須小学校　６年　柿崎　由宇
　　広島市立高南小学校　６年　河野　和希

平　和　宣　言

被爆から８１年が経過した今、私たちが暮らすこの地球上では、核を脅しの道具に使った軍事侵攻や国際法をないがしろにする大国の横暴な振る舞いが繰り返されています。また、今年開催されたNPT(核兵器不拡散条約)再検討会議では、過去２回に続き成果文書が不採択となりました。その原因は、他国に責任を転嫁し自国の行動を正当化する為政者の言動にあります。また、こうした為政者の言動は、NPTが定める義務を無視するに等しく、世界の平和と安定を根底から揺るがすものです。

このままでは世界中で不信の連鎖が進み、欲望がむき出しになっていた第二次世界大戦の時代に回帰してしまいます。核兵器の非人道性を軽視し、自国の繁栄のための武力行使を認めることは、暴力を伴う報復の連鎖を許容し、第三のヒロシマ・ナガサキを作り出すことになりかねません。

皆さん、ここで再度、あの惨禍を生き抜いた被爆者の体験に耳を傾けてください。当時１６歳だった女性は優しかった姉のことを振り返ります。まるで骸骨のように皮膚が崩れてなくなり、唇のない口から歯がむき出しになっていた姉の顔は、悪夢のようで信じられなかった。また、３歳で被爆した後に次々と病に襲われ、５５歳で白血病を発症し原爆症と診断された女性は、いつも次にどんな病気がくるのかという恐怖と隣り合わせの日々だったといいます。また、別の当時９歳だった男性は、多くの一般人が犠牲になっているロシアによるウクライナ侵攻を目の当たりにし、争いが起きない世界を創るため、自分の中の争いの心を乗り越え、相手の考えを受け入れる気持ちを持ってほしい、とりわけ若い世代には、そのために身近なことから考えてほしいと訴えます。

市民社会は、こうした被爆者の声や被爆者の思いを伝承する活動に鼓舞され、核兵器廃絶と平和を願う行動の輪を、国境を越え世代を超えて広げてきました。しかし、多くの為政者は現実的な対応として核抑止力に依存し続け、暴力を肯定する国際社会が出現し、核兵器のない世界は遠のくばかりです。戦争の記憶が薄れることで核兵器の使用が容認されかねない時代を生きる私たちは、今改めて、国連を創設し核兵器廃絶を決意した過去の教訓を学び直す必要があります。そして、一人一人があらゆる暴力を否定し、核兵器廃絶という理想を理想で終わらせない国際社会を創り上げるための行動を起こす必要があります。

そこで、若い世代の皆さんに提案があります。価値観の異なる人々との国境を越えた交流を深めてください。そうすることで、嬉しさや楽しさ、夢や希望を共有することができます。既に世界の多くの若者が、広島を始め様々な場で被爆の実相を学び、交流を深めています。皆さんも平和のために日常生活の中でできることを実践し、自らの思いを発信することで、その行動の輪を広げていってください。こうした取組は、お互いを認め合う平和文化を世界中に根付かせ、核兵器廃絶を国際社会の常識にすることにより、為政者が核抑止力に依存することを認めない環境づ

くりにつながります。広島市は、平和首長会議の８，５８９の加盟都市と連帯し、平和文化を世界中に広め、次の世代に伝える活動を後押しするとともに、「ヒロシマの心」を世界に訴え続けます。

世界の為政者の皆さん。市民社会は一日も早い核兵器廃絶を願っています。いったい、いつまで失望させ続けるのですか。核兵器の使用が人類に壊滅的な被害をもたらすこと、そして核軍縮・不拡散は、多国間で取り組むべき課題であることを十分理解されているはずです。また、核保有国の為政者の皆さんは、核軍縮に大きな責任を有しているのですから、自ら範を示す必要があることを十分認識されているはずです。世界の為政者の皆さん。自ら被爆地を訪れ、ヒロシマ・ナガサキの悲劇と真剣に向き合い、被爆者の平和への思いを受け止めてください。私たち市民社会は、為政者の皆さんが被爆地から核兵器廃絶への決意を世界に発信し、そのための政策を実行することを心から待ち望んでいます。

日本政府には、日本国憲法が掲げる崇高な理想を深く自覚し、国際社会において名誉ある地位を占めるための歩みを止めないでいただきたい。とりわけ、各国との分断や対立が生じかねない厳しい安全保障環境にあるからこそ、国民に犠牲を強いることのないよう、したたかで粘り強い外交に徹する中で、国際社会の平和と安定に向けて貢献し続けることを表明し、実行していただきたい。そのためにも、まずは今年１１月から開催される核兵器禁止条約の再検討会議にオブザーバー参加し、そして、一刻も早く締約国となっていただきたい。また、平均年齢が８６歳を超えた被爆者の支援策については、今なお抱えている様々な苦しみや苦悩に寄り添い、在外被爆者を含めた被爆者援護のあり方を踏まえた上で、その充実を図ることを強く求めます。

本日、被爆８１周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、力を尽くすことを誓います。そして、改めて市民社会に呼び掛けます。世界中の皆さん、被爆者の切実な思いが込められた「ヒロシマの心」を胸に、共に行動することで世界を変えていきましょう。

令和８年８月６日

広島市長　松井　一實

参加者一覧

参加生徒

学　校　名	氏　名	学　校　名	氏　名
清水中学校	舩越（ふなこし）　大夢（ひろむ）	明善中学校	後藤（ごとう）　優希（ゆうき）
鎌田中学校	中村（なかむら）　歩乃花（ほのか）	信明中学校	荻原（おぎわら）　愛実（まなみ）
丸ノ内中学校	小俣（おまた）　理瑚（りこ）	会田中学校	橋詰（はしづめ）　立槻（りつき）
旭町中学校	渡邉（わたなべ）　ほのか	安曇中学校	大城（おおしろ）　胡桃（くるみ）
松島中学校	岡野（おかの）　希衣（きい）	梓川中学校	佐原（さはら）　直樹（なおき）
高綱中学校	矢口（やぐち）　紘太郎（こうたろう）	波田中学校	髙木（たかぎ）　莉央（りお）
菅野中学校	村田（むらた）　夏星（かほ）	鉢盛中学校	大野田（おおのた）　愛子（あいこ）
筑摩野中学校	田中（たなか）　こころ	信大付属松本中学校	大月（おおつき）　勇人（はやと）
山辺中学校	藤澤（ふじさわ）　亜希（あき）	才教学園中学校	佐藤（さとう）　くるみ
開成中学校	松下（まつした）　桃香（ももか）	松本秀峰中等教育学校	春日（かすが）　香凛（かりん）
女鳥羽中学校	桐山（きりやま）　朱愛（しゅな）	松本国際中学校	竹尾（たけお）　都望（とも）

松本ユース平和ネットワーク

所　属	氏　名
松本美須々ヶ丘高等学校　２年	村瀬（むらせ）　紗世（さよ）

事務局

所　属	役　職　等	氏　名
山辺中学校	教　諭	粟飯原（あいはら）　頌（しょう）
女鳥羽中学校	教　諭	青柳（あおやぎ）　史子（ふみこ）
平和人権共生課	主　事	上條（かみじょう）　蒼空（そら）

旅の日程

	時　間	項　目	備　考
8月5日（水）	6:30	松本駅東西自由通路へ集合	受付
	6:35	出発式	
	7:04～9:18	松本駅　⇒　名古屋駅	しなの2号
	9:41～11:59	名古屋駅　⇒　広島駅	のぞみ61号
	12:00～12:30	広島駅　⇒　昼食会場	徒歩
	12:15～12:50	昼食	
	12:30～13:10	昼食（ひろしまお好み物語駅前ひろば） 広島フルフォーカスビル6階	おこのみやき ソフトドリンク
	13:20～13:40	昼食会場⇒ANA クラウンプラザホテル広島	貸切バス
	14:00～16:30	令和8年度　「全国平和学習の集い」	
	16:45～17:15	ANA クラウンプラザホテル広島　⇒　ホテル	貸切バス
	17:15頃	オリエンタルホテル広島　着	
	18:00～19:00	夕食（ホテル）	
6日（木）	6:00～（予定）	朝食（ホテル）/フロント6：50集合	
	7:00～7:20	ホテル　⇒　広島平和記念公園	徒歩
	7:30～8:45	広島平和記念式典	
	9:00～10:15	広島平和記念公園内見学	折鶴献呈
	10:30～11:45	広島平和記念公園　⇒　昼食会場	貸切バス
	11:45～12:30	昼食（呉ハイカラ食堂）	潜水艦カレーセット
	12:45～13:30	昼食会場　⇒　江田島旧海軍兵学校	貸切バス
	13:45～15:15	江田島旧海軍兵学校見学	
	15:40～17:00	江田島旧海軍兵学校　⇒　ホテル	貸切バス
	17:00頃	オリエンタルホテル広島　着	
	17:30～18:30	夕食	
7日（金）	6:30～7:10	朝食（ホテル）/7時50分フロント集合	
	8:00～8:30	ホテル　⇒　広島平和記念公園	徒歩
	8:30～10:20	広島平和記念資料館等見学	
	10:30～11:00	広島平和記念公園　⇒　広島駅	貸切バス
	11:00～11:45	広島駅（お土産）	
	12:03～14:19	広島駅　⇒　名古屋駅	のぞみ94号(車内で昼食)
	15:00～17:04	名古屋駅　⇒　松本駅	しなの17号
	17:10	解散式（松本駅東西自由通路）	

平和都市宣言

世界の恒久平和は人類共通の願いである。

われわれは、平和を愛するすべての人々とともに、
核兵器の廃絶と戦争のない明るい住みよいあすの郷土
を願い、ここに「平和都市」の宣言をする。

昭和６１年９月２５日

宣言の趣旨は、平和の確保・核兵器の廃絶を願いとしています。
私たち松本市の「平和都市宣言」が力強い宣言となるよう、暮らしに根ざして、平和の願いを大きく、根強く、たくましく育て続けていくことが大切です。

ひろしま レポート

第36回広島平和記念式典参加事業

2026.11

編集発行:松本市 住民自治局 平和人権共生課



松本市役所前庭に設置されている「平和の灯（ともしび）」

　松本市では、松本市平和都市宣言の理念に基づき、一人ひとりが命を大切にし、永久に平和であることを願い、平和を創る取り組みを広げるため、「平和の灯」を灯しました。

　この灯が市民の平和のシンボルとなり、多くの皆さんが命の大切さや平和の尊さを考え、平和の連鎖がより一層広がっていくことを願っています。

